文書館資料にみる岡部藩主安部家の文化交流の一断面

―長島藩・空々琴社との交流―

髙田智仁

はじめに

武蔵国血洗島村（現深谷市）が生んだ偉人渋沢栄一（一八四〇―一九三一）は、青年の時分、御用金調達がために父の名代として領主の陣屋へと出頭した。その際、領主の代官から嘲笑を受けたことで幕府政治の弊、身分社会の不合理に対する強い発憤の情を心中に沸き起こしたとのエピソードは有名である。(1)

栄一を罵倒した代官の主君こそ、本稿で採り上げる武蔵国岡部に本拠を置いた大名、岡部藩主安部家である。

そも、岡部藩は、川越藩、岩槻藩、忍藩らとともに江戸時代の武蔵国、現在の埼玉県域に所領を有した藩の一つで、藩主である安部家は徳川家康の関東入国以前よりその下で武功を挙げてきた譜代の大名である。表高二〇二五〇石と他の三藩に比して小藩ではあったものの、徳川幕府治世下において転封することなく埼玉県内に根拠地(2)を置いたことから、本県とは殊更の縁があるといえる。

新一万円札肖像への採用などで今後渋沢栄一に脚光が当たっていくなかで、偉人栄一を嘲った悪玉として岡部藩・安部家のイメージが固まってしまうのはあまりに惜しいことと言わざるをえない。そこで、本稿ではこの岡部藩主安部家の活動に改めてスポットをあてることで、肯定的に評価すべき面についても明らかなものとしておきたい。

無論、岡部藩の活動についてはこれまでにも多くの研究蓄積(3)があり、藩政や藩財政等について詳細に論じられてきた。反面、県下における研究状況を含めてこれまで触れてこられなかったのが藩主の文化面での業績や交際などに関わる分野といってよい。

「藩治には取り立てて見るべきものはない」(4)などとも一蹴される安部家の藩政ではあるが、大名俳諧など近年の大名文化とその周縁を巡る研究等をみていくと、安部家を中心に据えた著作・論考でこそないものの、なかに安部家の名が登場するものも多く、同家が意外ともいってよいほど大名間や文化人のコミュニティのなかで文化的・人的交流を深めていた事実が垣間見えるようになってきている。

幸いなことに、岡部藩主安部家に関わる文書のうち散佚を免れた資料群が当館へと収蔵されており、「岡部藩主安部家文書」五四七点、「池田氏収集岡部藩安部家文書」七〇点の計六一七点が往時の様相を今日まで伝えている。(5)そして、これらのなかには安部家の文化面における事績を追いうる複数の資料を見出すことができる。

本稿では、安部家の文化面における活動のうち、当館収蔵文書を基に、なかでも伊勢長島藩とりわけその五代目藩主であった増山正賢（一七五四―一八一九）及び、正賢とも関わりのあった七絃琴に傾倒した文化人たちとの交際についてみていくこととしたい。

一　安部家と大坂勤番

本項では、実際の交際の事例に入る前段階として一先ず安部家と岡部藩の概略を示すとともに、江戸時代を通じて安部家歴代が担ってきた大坂勤番について改めて紹介しておきたい。

というのも、在坂が伴う定番・加番ら大坂勤番への従事によって、安部家には経済的、文化的にも非常に大きな利益がもたらされていたためである。

（一）安部家と岡部藩領

安部家は、大名に列座した信盛（一五八四―一六七四）以後、最後の当主信発（一八四七―一八九五）まで十三人の当主が岡部藩主の座についた。

【安部家歴代当主】

安部元真―信勝―①信盛―②信之―③信友―④信峯―⑤信賢―⑥信平＝⑦信允―⑧信亨―⑨信操―⑩信任＝⑪信古―⑫信宝＝⑬信発

安部家では、信盛の祖父元真（一五一三―一五八七）の時分に、徳川家康（一五四三―一六一六）に属して武功を重ね、天正十八年（一五八〇）の家康の関東入国に際して元真の子・信勝（一五五二―一六〇〇）が武蔵国榛沢・下野国梁田に拝領した五二五〇石を礎に発展した。

信勝の子・信盛の時代には、三河国八名郡内に四〇〇〇石、次いで慶安二年（一六四九）には大坂定番（京橋口）に任ぜられたことで摂津国四郡内に一〇〇〇〇石を加増された。ここにおいて、安部家は所領一九二五〇石を数えて大名に列することとなった。

その後の安部家では、信之（一六〇四―一六八三）が寛文八年（一六六八）に大坂定番（玉造口）就任に伴い三〇〇〇石（三河国宝飯郡内）の加増を受けたほか、嫡男信友（一六三八―一七〇一）が天和二年（一六八二）に大坂大番頭を命ぜられて更に丹波国に二〇〇〇石が加増された。また、信友は延宝八年（一六八〇）に安部家当主として初めて大坂加番（青屋口）にも就任している。

分知などを経ながら、最終的には信峯（一六五九―一七〇六）の代の所領高計二〇二五〇石が岡部藩安部家の表高として確定した。

所領は、その後も僅かながらに移動・変更があり、天明七年（一七八七）時点では武蔵国四三七七石余、上野国八七四石余、摂津国七〇〇〇石、三河国六〇〇〇石、丹波国二〇〇〇石[6]となっている。五か国に分散する所領経営のため、本拠地の岡部のほか、三河国半原（現愛知県新城市）、摂津国桜井谷（現大阪府豊中市）にそれぞれ陣屋を設けて統括する形式をとった点、本拠地の関東よりも上方に多大な所領を有していた点は岡部藩の特徴の一つともいえるだろう。

（二）安部家の大坂勤番就任と「役得」

大坂勤番についてはこれまで多くの論考[7]によってその実相が明らかとされてきたため、ここでは概略を述べるに留めて安部家の文化面へ

の影響という観点から見ていくこととしたい。

大坂勤番のうち、定番は大坂城代の補佐役として設置された役職で、城代の下で大坂城守衛を主としながら西国で発生した問題処理の補佐に当たるほか、大坂町奉行の取り仕切る行政面にも参与するなど西国統治の重責を担った[8]。時期によって異なるが、定員は二名（京橋口、玉造口）で、その下には与力三十騎、同心百人が配された。

初期の定番就任者には、信盛の例にみえるように重職を担うことへの加増として一〇〇〇〇石程が大坂城周辺に配された例が多い。その後、直接領地を宛がう方式は改められ、就任時に費用として三〇〇〇両が下賜されたほか、延享二年（一七四五）からは在任時に年間役料三〇〇〇俵（一二〇〇石）が支給されることとなった[9]。

なお、定番は城代を補佐する重職として、担当する城門付近に屋敷を与えられ、本来は江戸に住まわせるべき妻子を伴ってその任に当たることが許された。就任にあたっては、死去ないしは病等による辞職がなされるまで勤続することが求められ、十年以上の勤務をするものも多数にのぼっている。

一方の加番は、大坂城の警備に当たった大番を支える加勢役であり、寛永年間に始まった。任期は定番と異なり一年と定められており、着任する人数は時代によって変遷があるが、制度の定着以降は山里・中小屋・青屋口・雁木坂に各一名の計四人があたった。

加番の最も大きな特色は就任した大名に対して扶持米が支給される点で、延享三年（一七四六）には、山里加番二七〇〇〇石、中小屋加番一八〇〇〇石、青屋口・雁木坂加番がそれぞれ一〇〇〇〇石と持ち場によって役高が定められ、以後任期中はその役高の四つ物成（四割）が金や米などによって支払われている。加番在任時に支給される扶持米は財政難に苦しむ大名らにとっては魅力であり、加番周旋の運動をする大名も少なくなかったとされる[10]。

さて、翻って安部家の大坂勤番の就任状況を見てみると、初代藩主信盛が京橋口定番を勤めて以降、信之、信友、信允、信亨の四人の藩主が定番職に就いている【表1】。三度以上の定番就任を経験しているが故に、今日の研究では安部家は特に「定番の家筋」とも位置付けられている[11]。

加番についても、信友の青屋口加番への就任を皮切りに六代目の信平以降、最後の信発を除いた歴代藩主が必ず任ぜられている【表2】。

【表1】安部家当主定番就任者一覧

藩主名	在任期間	担当	加増
①安部信盛	慶安2～万治3年 （1649－1660 12年）	京橋口	10000石 （摂津）
②安部信之	寛文8～延宝5年 （1668－1677 10年）	玉造口	3000石 （三河）
③安部信友	貞享3～元禄14年 （1686－1701 16年）	玉造口	2000石（大番頭時） （丹波）
⑦安部信充	明和8～天明元年 （1771－1781 11年）	玉造口	—
⑧安部信亨	寛政7～文化元年 （1795－1804 10年）	京橋口	—

【表2】安部家当主加番就任者一覧

藩主名	在任期間	担当
③安部信友	延宝8年（1680）	青屋口
⑥安部信平	元文2年（1737） 寛保元年（1741）	青屋口 青屋口
⑦安部信允	宝暦3年（1753） 宝暦13年（1763）	中小屋 青屋口
⑧安部信亨	天明6年（1786）	中小屋
⑨安部信操	文化10年（1813）	青屋口
⑩安部信任	文政10年（1827）	青屋口
⑪安部信古	天保3年（1832） 天保13年（1842）※途中死没	青屋口 青屋口
⑫安部信宝	安政5年（1858） 文久2年（1862）※途中交代	青屋口 山里口

※表1は、「大坂定番一覧」（特別展図録『徳川大坂城―西国支配の拠点―』大阪城天守閣、2008年）を参照。
※表2は、「大阪加番大名一覧」（徳川時代大坂城関係史料集第一号『大坂加番記録（一）』大阪城天守閣、1997年）を参照。

安部家では、所領の分散という課題を抱えることになった反面、初期の大坂勤番就任時に加増された畿内領が藩収の凡そ過半を生み出し、[12]これに加えて江戸時代を通じて任ぜられた大坂勤番を介して支払われた役料が財政を支えたことで、一説には富裕大名に数えられたとの評価もみえている。[13]

また大坂定番・加番への幾度にも及ぶ就任は、藩の財政を潤わせる効果があったことに加えて、文化的先進地域であった上方の文化吸収、人的ネットワーク構築を促進させる意味でも同家に大きな利益をもたらしたと言ってよい。[14]

以下に、安部家と同じく加番を勤めた大名らによる大坂勤番での「活動」を傍証として挙げておこう。

丹後峰山藩主京極高久（一七二九―一八〇八）は明和七年（一七七〇）から青屋口加番を勤めたが、藩主とともに在坂した同藩家老辻八兵衛によってその際の記録（『公私用覚書』[15]）が留められている。

同記録では、寄合などを通じて大坂勤番同士が多々顔を合わせていたことが記されており、特に年頭においては定番、加番、大番頭らが年始の寿ぎの挨拶を交わし、順繰りに城代・勤番らを屋敷に招請していたことがみえている。

二月一日条

一　同日、昨日迄ニ諸道具相揃、大かた一式山里様ゟ御借用、不足之分者損料数、御多葉粉盆ハ井上筑後守様ゟ御借用（中略）御書院御床（狩野周信）周信筆三幅対、卓香炉、次床御城代様御刀懸、御定番様御刀懸、右白木料紙箱、硯、御床下之方五腰懸、御刀懸ケ二脚、居間二幅対、御懸物御花、荒増右之通り也。

※傍線は稿者、以下同。

この日、京極家では城代久世広明（一七三二―一七八五）を筆頭に、京橋口定番下総高岡藩主井上正国（一七三九―一七九一）ほか加番三名、大番頭二名、大坂町奉行一名ら在坂の主要面子を招いての饗応が催された。饗応により一同が集うこともさることながら、その準備の途上で饗応に要する調度品のうち、不足の品を同じ加番である越前大野藩主土井利貞（山里様　一七四一―一八〇七）、また前掲の定番井上正国より都合をつけて整えている点は、勤番同士が日頃から相互に協力する体制にあったことを示している。

この例からみえるように、大坂勤番の大名同士は、大坂在任時には公的・私的な場を通じて相応の知己を得ていた。[16]

また、安永四年（一七七五）に山里加番となった丹波福知山藩主朽木綱貞（一七一三―一七八八）が江戸の息子昌綱に宛てた書状[17]には、赴任の途上で宿泊した大坂の豪商鴻池家で古法眼（狩野元信）の彩色布袋、狩野探幽の山水などを眼にしたことのほか、着任後も日々道具屋（書画文物を取り扱う商人）が訪れ、狩野松栄の大幅を入手できたので江戸に戻るまでには掘り出し物が見つかりそうだなどとの書画入手への大きな期待も書き綴られており、大坂在任が大名たちの文化的欲求を満たす好機であったことが露わとなっている。

前掲『公私用覚書』の筆者辻八兵衛もまた、大坂鉄砲奉行伴権左衛門からの懇望で狩野栄川（典信）画を贈っている（五月二十三日条）ほか、任期を終え帰国の準備を整えるさなかには、蔵屋敷を管理する

長浜屋新六より餞別として吉村周山の三幅対を譲り受け、八兵衛側からも同人の画二枚を贈る（七月十七日条）など、文物を介した交流は藩主のみならず在坂の家臣にも広がるものであった。

峰山藩ならびに朽木綱貞らの記録は、安部信允の玉造口定番在任期間にも近く、安部家（ならびに岡部藩）でもこうした在坂役人間のネットワーク形成と上方文化の摂取がなされていたとみても間違いではないだろう。

その結実した一つの形とも言えるのが、次項で述べる伊勢長島藩主増山正賢との交際である。

二　伊勢長島藩主増山正賢との交わり

安部家十三人の藩主のうち、信盛から信平については残存する史料も少なく、その文化面における事績は現時点では詳らかにならない。一方、信允以後の藩主では、信允、信操による藩校就将館の創設・運営が知られているほか、当館収蔵資料内にも信操・信古らの書画類が散見するなど、文雅の遺芳がおぼろげながらも伝わっている。

そうしたなか、管見の範囲で安部家のなかで最も文化活動に力をいれ、その事績に優れたのは信允ならびに息子信亨といってよい。

信允は特に大和郡山藩主であった柳沢信鴻（一七二四―一七九二）の俳諧サロンに参じていたことが指摘[18]されているほか、信亨は伊勢長島藩の藩主である増山雪斎こと増山正賢（一七五四―一八一九）との親交があった。

ここでは後述する琴社との絡みもあるため、信亨と正賢の交際について述べておこう。

博物学史上においても重要な資料である『虫豸帖』（東京国立博物館蔵）の筆者でもある増山正賢は、雪斎と号して書画に優れ、多くの文化人とも交流を持った風流大名として古くから世に名を知られる。紙幅の関係もあるため正賢の個々の研究蓄積[19]については割愛するが、その事績は大名文化人の筆頭に数えられるといっても過言ではあるまい。

増山家と安部家の接近がいつ頃にあったのかは定かではないが、増山家と安部家は大坂勤番に就く家柄という共通点があり、正賢にしても四度に渡って加番を勤めている。

その正賢が初めて加番を勤めた安永七年（一七七八）時に玉造口定番として入っていたのが安部信允であり、定番と加番の間に頻繁な交流があったことは前項で挙げたとおりである。そのため、この時期の大坂勤番が安部家と増山家両家の交際における契機の一つであった可能性はあろう。

ともあれ、結果として両家が親密な間柄であったことは、信允の嫡子信亨の娘が正賢の嫡子正寧（一七八五―一八四二）に嫁いでいること[20]からも明らかである。

また、その親密さは家同士の「公」の関係に止まらず、藩主同士の「私」の部分においても同様であった。

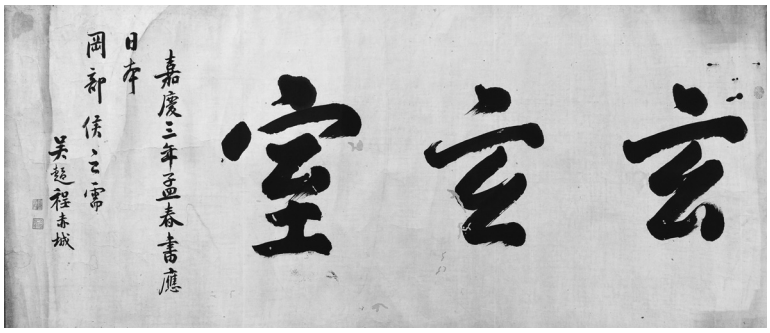
浄土真宗の僧侶で詩・画ともに長じて世の文化人らと交流のあった釈雲室（一七五三―一八二七）が記した『雲室随筆』[21]は当時の書画壇の師友関係や文化人について記した記録だが、そのなかに安部家と増山家の親交を伝える記事が登場する。

雪斎曽君選増山河内守殿（伊勢長島侯）大名にての一人にて、風流抜群の人なり。書画ともに直に華人によりて修せらると申事なりしが、当時世の中の振合遠慮被致、風流家出入も皆断りにてありき。安部摂津守殿（武州岡部侯）、武田安芸守殿（高家）、久世三四郎殿、井戸甚介殿、皆河内守殿交り厚友にて有けり。[22]

右に登場する「安部摂津守殿」は信亨を指し、武田安芸守は前出の柳沢信鴻の三男で高家武田家に養子に入った武田信明（一七五三―一七八八）、久世三四郎は五一〇〇石余を知行した大身旗本久世広景（生歿年不詳）、井戸甚介は宋紫石に学んで沈南蘋風の画を善くした旗本画人董九如（井戸直道　一七四五―一八〇二）がそれぞれ該当する。

信亨と正賢が文化人の間で「交り厚友」として認知されるにあたっては、その実、華人（清国人）に教えを請うほどではないにしろ、信亨もまた正賢と同じく唐物を愛玩した風流人であったことが大きいと言える。[23]

信亨の唐物好きを示す証左の一つが、長崎来舶商人の一人程赤城（一七三五―一八〇八？）筆の額字【図1】である。程赤城は日清交易に携わる船主として安永六年（一七七七）から文化五年（一八〇八）までの三〇余年間に十八回に渡って日本を訪れた人物で、多くの日本文化人と親交があった。該当の額字には「嘉慶三年（一七九八）孟春書応／日本／岡部侯之需／呉趨程赤城」の為書があり、程赤城から岡部藩主安部家（信亨）へと贈られた品であることが明らかである。



【図1】程赤城筆　額字「玄玄室」（安部家文書№540）

実際、安部家ではこうした唐物趣向の欲求を満たすための人的ネットワークも有しており、信亨は正賢が懇意にしていた木村蒹葭堂（一七三六―一八〇二）との誼を通じていた。[24] 蒹葭堂は言うまでもなく大坂が生んだ大知識人で、時に長崎の唐通事を介し、あるいは来舶商人らと直接書翰の往来をすることでその書画や中国文物を入手していた事で知られる。

これら安部家における唐物嗜好と海外との交流については別稿にて詳細に言及することとしたいが、信亨の時代に当代随一の大名文化人であった増山正賢・木村蒹葭堂との交流があったこと、またその交流を支えたであろう共通項の一つに唐物趣向の存在があった点は特筆すべき事項として認識されてよい。

ここまでみてきたところからは、安部信亨と増山正賢とは、縁戚関係となったことのみならず文化面においても同好の士として、その関係は極めて親密なものであったことが確認できる。

三　安部家と空々琴社

（一）児玉空々と琴社について

さて、前項で増山正賢と安部家の関わりについて触れたが、本項では更に琴（七絃琴）を介した交遊について言及することとしよう。

江戸時代における「琴」というのはあまり耳慣れない感じがあるが、琴は我が国には古く奈良時代に伝来し、一旦廃れはしたものの延宝五年（一六七七）に明人・東皐心越（一六三九―一六九五）が来日したことに伴い、再度の盛り上がりをみせた。心越は、詩文・書画・篆刻とともに琴を善くし、当時の中国文化を学ぶ日本の文人の尊崇を集めたことから、以降文人の嗜むべき「琴棋書画」四芸の一つであった琴も盛んとなったのである。

琴に心を寄せた人物には、萩生徂徠、頼山陽、亀田鵬斎、梁川星巌、佐久間象山ら名だたる文化人がおり、禄八〇〇〇石の旗本杉浦正職（号琴山　一六六〇―一七一一）ほか幕臣、藩士など武家階層にもその愛好者は広がっていた。江戸時代を通じて、少なくとも六五〇人の琴士[25]が確認されており、大名では神戸藩主本多忠統（号猗蘭　一六九一―一七五七）もその一人であった。そして、増山正賢ならびに安部信亨の両者も琴に関心を寄せた人物に数えられるのである。

江戸時代を代表する琴士の一人に、児玉空々（一七三五―一八一一）がいる。空々は、名を慎、字を黙甫といい、別に宿谷空々とも称された人物で、田安徳川家の藩儒として勤める傍ら、旗本幸田親盈[26]（一六九二―一七五九）に琴を学び、自ら琴社（琴愛好家が集う結社）を立ち上げ牛込安養寺を会場に活動した。

空々琴社については諸子の論考[27]に詳しく、その社友を書き上げた「琴社諸友記」等[28]の資料により、その社中が大名、幕臣、諸藩士、文化人ら九十七名にて構成される大きなものであったことが判明している。そして、その社友のなかに長島侯（増山正賢）と岡部侯（安部信亨）もまた名を連ねていた[29]。

加えて、前出の久世三四郎（久世広景）もその一員として参加しており、『雲室随筆』にて名の上がった人々を結ぶネットワークの背景の一つに七絃琴の存在があったことが浮かび上がる。

先に挙げた「琴社諸友記」にはこの三名の入社時期についても記載がある。それによれば三人のなかでは久世広景が天明三年（一七八三）と最も早い入社で、次いで信亨の天明五年、正賢の天明六年となる。入社時は信亨二十九歳、正賢三十三歳にあたり、両名は若い時分から琴学の世界に足を踏み入れ、交誼を結んでいた。入社の順番から鑑みると、琴に関しては久世広景が早くに関心を寄せ、親交のあった二人を招き入れたのかもしれない。

両大名による琴への傾倒が如何様であったのか、残念ながらその詳細は判然としないが、この琴社の規約の一つには「一、会之事。弾琴之余、賦詩誦書、作字描画、或唱詞曲弄糸竹、従各所好。但衆人相会、語言易譁、或談経史論文章、固自佳。説鬼毀俗、又無不可。特不許説雲路談市井耳。」[30]が掲げられており、市井の噂話を除き、琴の演奏はもとより、楽曲の演奏、詩書画の制作、また経史について談ずるなど全てが自由とされていた。

信亨らは時に琴を奏でつつ、あわせて俗事を避けた文化人のサロンのなかで風雅の空気に浸ることを楽しんだのではないだろうか。

（二）空々琴社と安部家の文雅

この児玉空々と安部信亨との間に接点があったことは、これまでの研究にも言及があったが、そのなかで実際にどのような交流があったのかについては詳びらかとなっていなかった。しかし、当館収蔵の安部家文書には、児玉空々ならびにその門弟と安部家、さらに長島藩が

加わった往時の交際の一端を示す資料が存在する。

それが、詩巻「暮春　岡部侯の静遠舘に従ず」[31]である（図版は末尾に掲載）。本資料は、同題に即して詠ぜられた詩を書した未表装の寄合書の作品である。

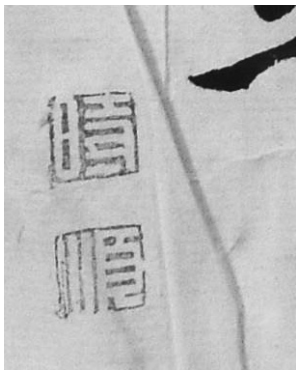
詩を詠じたのは、登場順に①児玉慎（児玉空々）、②篠本廉（篠本竹堂）、③沙門瑞林（詳細不詳）、④十時賜（十時梅厓）、⑤南湖鯤（春木南湖）、⑥邉瑛（渡辺玄対）、⑦大塚長幹、⑧菊武昭（菊池武昭）、⑨滕正肇（詳細不詳）、⑩井士義（井上士義）、⑪源定淳（稲垣定淳）らの計十一人にのぼっている。

詩題にある「静遠舘」についてはその名を冠した建物を見いだせていないが、詩の内容より察するに岡部侯（信亨）が新築した別業を指し、本詩巻が信亨の別邸新築祝いに伴い催された宴席に際して制作されたものであることを示す。

詩巻に寄せられた詩は概ね完成した別業の風光明媚な様や宴席の風雅を詠いあげたものとなっているが、そこからは信亨もまた庭園造営に思案を巡らしていたことの片鱗が見て取れる。[32]

その制作年代は、列席者の生歿年を加味し、信亨が琴社に加入した天明五年（一七八五）から井上士義が致仕して隠居した寛政十二年（一八〇〇）の間と推定される。その間の岡部藩では寛政六年正月に麹町近辺から発生した大火災によって永田馬場山王の上屋敷と四谷にあった下屋敷が全焼するなどの大被害を被っており、本詩巻はあるいは上屋敷再建新築祝いの席での制作であろうか。であれば、屋敷普請が同年八月までの作業であったことから、年が明けた寛政七年、信亨が四月に定番として大坂へ赴く直前の暮春（三月）に催された可能性が挙げられる。

ただ、本詩巻は、十一人の詠者に対して筆跡が㈠児玉・篠本詩、㈡瑞林詩、㈢その他詩の三種類しかなく、また十時梅厓の落款に添えられた白文連珠印【図2】は、梅厓の養子である十時梅谷（生歿年不詳。名は順、長島藩士）[33]の名を示す「時」「順」となっている。これらから判断すれば、本資料は制作当時のものではなく梅谷の時代の写本ではないかと考えられる。



【図2】梅谷落款印

出席者のうち人物比定が適わなかった③⑨を除いて、素性の判る出席者はおおむね以下のグループに分けられる。それぞれの略歴を示しておく。

（一）空々琴社社友…①②⑦　（二）長島藩関係…④⑤⑪
（三）岡部藩士…⑧⑩　（四）文化人…⑥

【空々琴社社友】

①児玉空々：前掲。空々琴社の主で田安徳川家儒臣。本作では七言律詩、五言律詩各一首の二首を呈す。

②篠本竹堂：一七四三―一八〇九。児玉空々の高弟で幕臣。名は廉、字は子温、竹堂は号。明和初年（一七六四）に琴社に加入。本作では五言排律一首を呈す。

⑦大塚長幹：生歿年不詳。尾張藩士。名は長幹、字は伯誉。琴社には天明二年（一七八二）に加入。本作では七言律詩一首を呈す。

【長島藩関係】

④十時梅厓：一七四九―一八〇四。長島藩儒。名は賜、字は子羽。正賢の命で長崎に遊学して来舶清人と交流したほか、尾張の商人などとも通じるなど広い人脈を有していた。書画の仲介者としても知られ、信亨筆の書画の用立てもしており、安部家との関係は深い。[34] 本作では五言律詩一首を呈す。

⑤春木南湖：一七五九―一八三九。長島藩抱絵師。名は鯤、字は子魚。長崎に遊学したほか、梅厓とともに木村蒹葭堂と親しく交遊しており、南湖と蒹葭堂が大坂在任中の信亨を訪れていることが蒹葭堂の日記に留められている。本作では七言律詩一首を呈す。

⑪稲垣定淳：一七六二―一八三二。近江山上藩主稲垣定計の子。大坂定番、加番それぞれ一回を勤めた。定淳の姉が正賢に嫁いでおり、正賢とは義兄弟の関係にあったことからここに分類しておく。

定淳は天明四年（一七八四）に正賢とともに江戸に下向してきた木村蒹葭堂帰坂の送別会に出席、その宴には正賢のほか、詩巻にも名がみえる渡辺玄対（後掲）も出席している。[35] 定淳は号を如蘭と名乗った文人大名で、特に焼き鏝を用いて描く焼画を善くしたほか篆刻、和歌俳諧にも秀でた。[36] 寛政年間に自ら刻した印を収めた『龍眠堂印譜』を制作したほか、刀剣の調度品を好んで収集したエピソードが本間游清（一七八一―一八五〇）の随筆『みゝと川』に収録される。[37] 本作では七言絶句一首を呈するが、詩の自跋によれば当日は脚の病によって出席していない。

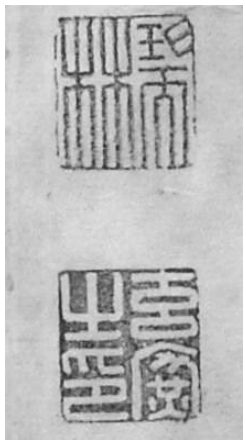
【岡部藩士】

⑧菊池武昭：一七四七―一八〇七。岡部藩家老。高三〇〇石。通称安太夫。信允・信亨・信操に近侍して活躍した。[38] 菊池家は少なくとも元禄年間から代々岡部藩家老を勤めており、歴代は安太夫ないしは安兵衛を通称とした。その功績は「安部家にも過ぎたるものが二つある。菊池安兵衛ととび焼の瓶」と謡われる。[39] 本作では七言律詩一首を呈す。

⑩井上士義：生没年不詳。岡部藩儒。高十人口。岡部藩校就将館で教鞭をとった井上俊蔵と思われる。天明五年（一七八五）九月より岡部藩に仕え、寛政十二年（一八〇〇）に致仕した。[40] 本作では最長となる五言排律一首を呈している。

【文化人】

⑥渡辺玄対：一七四九―一八二二。名は瑛、字は廷輝。絵師で谷文晁の師として知られ、前出の『雲室随筆』のほか、『古画備考』などにその名がみえる。六十歳の時、旧姓の内田に改めた。増山正賢、柳沢信鴻ら諸大名と交遊があり、春木南湖とも関係があった。[41] 本作では五言律詩一首を呈す。



【図３】瑞林落款印

このほか、身上が明らかとならない人物二名であるが、③沙門瑞林の詩には、十時梅谷と同様に押印（印文「瑞林」「玄■（庶カ）之印」【図３】）がなされている。二名のみが落款印を添えていることからすれば、あるいは両名が写しの制作に関わった人物であろうか。また、⑨滕正肇は岡部藩士に挟まれていることから、同じく藩士の可能性が高いように思われるが、同時期の岡部藩士のなかには該当する人物は見いだせない。

本詩巻に増山正賢による詩が収められていないのは残念ではあるが、長島藩士である十時梅厓、春木南湖らが詩を呈したのはまず間違いなく正賢と信亨との交際が背景にあってのことであり、本詩巻は、これまでの諸研究による安部家の交際（児玉空々率いる琴社連中のほか、長島藩主の正賢及び藩士たち）の事実を裏付けている。と同時に渡辺玄対、稲垣定淳ら、信亨の新たな交際範囲を示す資料としても位置づけられる。本詩巻を巡っては周辺の資料がないためにここからこれ以上の交流の実相に迫るのは難しいところではあるものの、それでも信亨を含め、その周辺に集った人物の顔ぶれと範囲、そして文化的教養の高さは無視しえないものがある。

また、その交際圏には岡部藩士も入り込んでいたことが新たに確認でき、就将館で儒官となった井上俊蔵こと士義が列席者中最長の詩を献じてその面目を保つとともに、藩家老菊池武昭も中国・東晋の書聖王羲之（右軍　三〇三―三六一）が催した蘭亭曲水の宴[42]の典故を引くなど、藩士らの教養の高さも垣間見え、藩主とともに岡部藩士の文化面での事績が判る資料としても非常に貴重といえよう。

おわりに

以上、本稿では、これまでの先行研究で諸記録をもとに指摘されてきた安部家の交際関係について、当館が収蔵する実資料を基にその実相の一端を提示した。

本来であれば詩文の内容などまで掘り下げて論ずべきではあるが、安部家の文化面への関心と、そこに生じた交際関係が意外なほどの広がりを有していたことを僅かながらも明らかとしえたものと思う。

安部家の交際圏については、登場人物から鑑みるに同家が勤めた定番・加番ら、大坂勤番の益するところが大きいものといえる。なかでも増山正賢の交際圏との重なりがみえることから、正賢との知遇を得たことが安部家の文化面の事跡に大きな影響を与えたことが指摘できるだろう。

本文中に登場した、増山正賢、稲垣定淳らはいずれも譜代大名であり、大坂勤番を経験する家柄の出身者たちであった。幕末期に最後の岡部藩主となった信発はもと武蔵六浦藩主米倉昌寿の息子であるが、米倉家もまた大坂勤番に任ぜられる家柄であった。恐らくは譜代大名、大坂勤番に任ぜられる家柄であるということが相互の交際を始めるうえでの前提の一つにあったのであろう。[43]これら「大坂勤番大名ネットワーク」のなかに安部家が位置し、文化的・人的な交際を発展させていたことが推察される。

文化人との関りについて、本文中では琴社の面々とともに絵師渡辺玄対を挙げることができたが、このほか安部家との交流があったことを期待できる文化人として、幕臣文化人大田南畝（一七四九―一八二三）の存在がある。南畝は増山正賢との接点があったほか、詩巻に詩を寄せた児玉空々、篠山竹堂らと殊のほかに親密な間柄であった。また、なにより南畝自身も安部家家臣浅田宗兵衛と懇意である旨を記した書状[44]を残していることからして、安部家の招きに応じて藩主とも交流があってもおかしくはないだろう。

本稿でみてきたなかにおいても、安部家の文化面における人脈は広範にわたっていたが、まだ安部家文書のなかには、大名俳諧において一大サロンを興した大和郡山藩主柳沢信鴻、茶人大名として名を知ら

れた松平不昧（治郷　一七五一―一八一八）との交際を示す資料等も確認できており、その文化活動と交際範囲にはさらなる奥行きがみえている。

今後、埋もれてしまっているであろう遺品を発掘し、安部家の知られざる一面について更なる解明を進めて行くこととしたい。

註

(1) 『渋沢栄一伝記資料』第一巻（渋沢栄一伝記資料刊行会、一九五五年）所収「二章　青年志士時代　安政三年丙辰」参照。

(2) 正式に岡部が本拠地に定められたのは安部信峯の時代の宝永二年（一七〇五）。それ以前は、『武鑑』では三河国半原、摂津国瓜生が本拠として扱われたほか、元禄期に記された大名評価記の一つ『土芥寇讎記』『諫懲記後正』では摂津国瓜生が本拠とされた。ただし、初代藩主信盛の父信勝が建立した岡部の玉鳳山源勝院が菩提寺とされていることからも当初から重んぜられた所領地であったことは間違いない。

なお、新政府体制下の慶応四年（一八六八）に飛び地所領の一つであった半原（現愛知県新城市）へと本拠を移し、半原藩となった。

(3) 代表的なものでは、『新編埼玉県史』通史編3近世1（埼玉県、一九八八年）、同通史編4近世2（一九八九年）をはじめ、安部家が陣屋を置いた桜井谷については『新修豊中市史』第1巻通史1（豊中市、二〇〇九年）、同第8巻社会経済（二〇〇五年）、同じく半原は『新城市誌』（新城市、一九六三年）において、それぞれ藩政などに言及される。『埼玉県教育史』第2巻（埼玉県教育委員会、一九六九年）は、安部家の教育の事跡について論じており、特に藩校について詳述する。このほか、近年では岡部藩・安部家の専著もみえ、安部家家臣であった高橋家文書（当館収蔵）から半原陣屋と役人たちの様相を記した、神谷智『江戸時代の地方役人と村人の日常的日々―「三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留を読む」―』（株式会社シンプリ、二〇一七年）、江戸時代前期の安部家当主の事跡に着目した、森竹敬浩『安倍奥の雄、安部家代々と金山衆山人たちはいかに徳川政権樹立支えたか』（静岡新聞社、二〇一六年）などが刊行されている。

(4) 前掲註3『埼玉県教育史』第2巻。

(5) 安部家文書は伝来の過程で二手に分かれており、「岡部藩主安部家文書」（以下、本稿では安部家文書）は安部家の子孫から当館へと寄贈され、「池田氏収集岡部藩安部家文書」（以下、池田氏収集文書）は安部家に養子にはいった信明の父池田謙斎の子孫から当館へと寄託された。伝来過程については、当館刊行の収蔵文書目録第二十一集『諸家文書目録Ⅲ』（一九八五年）を参照されたい。

(6) 前掲註3『新編埼玉県史』通史編4近世2所収「安倍信亨領地郷村高辻帳」参照。

(7) 加番については、松尾美恵子「大坂加番制について」（『徳川林政史研究所研究紀要（昭和四十九年度）』徳川黎明会、一九七五年）、同「近世末期大坂加番役の実態―三河田原藩を例に」（『徳川林政史研究所研究紀要（昭和五十七年度）』徳川黎明会、一九八三年）のほか、特別展解説図録『大坂加番　仰せ付けられ候』（勝山城博物館、二〇一一年）、定番については菅良樹『近世京都・大坂の幕府支配機構　所司代　城代　定番　町奉行』（清文堂出版、二〇一四年）、ならびに宮本裕次「研究ノート　大坂定番制の成立と展開」（『大坂城天守閣紀要』第三〇号　大阪城天守閣、二〇〇二年）などがあり、適宜参照した。

(8) 前掲註7菅氏論考参照。

(9) 明和八年（一七七一）に安部信允が定番に就任した際に役料三〇〇〇俵が支給されたことを示す「覚（大坂定番役料ニ付）」（安部家文書№53）が残る。

(10) 松尾美恵子「公儀勤役の選考方法について――大坂加番の場合」（『徳川林政史研究所研究紀要（昭和五〇年度）』徳川黎明会、一九七六年）参照。

(11) 前掲註7菅氏論考参照。

(12) 前掲註3『新編埼玉県史』通史編4近世2所収「文化8年岡部藩領年貢その他収納状況」参照。福島雅蔵『幕藩制の地域支配と在地構造』（柏書房、一九八七年）によれば、上方の生産力の高い経済的先進地帯の領有は藩財政を支え、また京・大坂商人からの多額の借銀を可能とするなど、「関東譜代大名にとり、財政経済上まさに垂涎の地」と位置付けられる。

(13) 明治年間に記された「[岡部藩略史]」（安部家文書No.121―5）では、「安部家カ富裕ナル大名中ニ数ヘラレシハ岡部領外ニ領地アリシニ因レリ」との回顧がなされている。これがいつの時代を指してのことかは不明。ただし、財政は健全とはいえず、寛政年間頃から家老を上方商人のもとに派遣して借財にあたらせていたことが安部家文書にはみえている。また、明治時代には財政は破綻寸前の状態となっていた。

(14) 前掲註7「近世末期大坂加番役の実態―三河田原藩を例に」で松尾氏は「大坂加番役は上方文化を吸収する絶好の機会であったともいえよう。」と述べる。また天保年間に大坂代官を勤めた竹垣直道を例に在坂武士の文化的交流と活動とを掘り下げた、内海寧子「『浪華勝槩帖』と大坂代官竹垣直道　在坂武士の文化交流」、松本望「大坂代官竹垣直道の文事交流」（いずれも『大坂の歴史』八十一号　大阪市史料調査会、二〇一三年）では、在坂文化人、武士間での交流の様相が明らかとされている。

(15) 「大坂加番記録(二)―明和七年八月～明和八年八月、青屋口加番京極高久―」（『徳川時代大坂城関係史料集』第二号　大阪城天守閣、一九九九年）所収。

(16) 有坂道子「増山雪斎と木村蒹葭堂」（『混沌』三十号　混沌社、二〇〇六年）では、増山正賢を含めた天明三年在坂の四人の加番がいずれも木村蒹葭堂と面識を有した理由として、加番同士間での親密なネットワークが根底にあったことを指摘する。

(17) 個人蔵。特別展図録『徳川大坂城―西国支配の拠点―』（大阪城天守閣、二〇〇八年）所収「朽木綱貞自筆書状」。

(18) 堀井寿郎「忘れられた大名俳諧」（柳沢史料集成第七巻『参勤交代年表　中』柳沢文庫保存会、一九九八年）所収。同論考で、安部信允が俳号浦夕として信鴻の日記『宴遊日記』に登場することが指摘される。安部信允と柳沢信鴻との交際については別稿にて紹介したい。

(19) 正賢の事績は、福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』（厚生閣、一九三七年）に載るのをはじめ、正賢の唐物趣向に言及した山口泰弘「江戸時代後期における中華文化受容の様相―画人増山雪斎二題―」（『三重大学教育学部紀要』六十四号　三重大学教育学部、二〇一三年）など多数の専論がある。近年では没後二〇〇年を記念した企画展「増山雪斎展」（二〇一九年）が三重県立美術館で開催された。

(20) 嘉永二年（一八四九）に安部家家臣が記した安倍元真から信古までの当主の事跡を編年で記した「滋安家譜」の下巻（安部家文書No.158―2）によれば、名をみの子（?―一八四〇）といい、正寧のもとに輿入れしたが、故あって離縁となっている。

(21) 『続日本随筆大成』第一巻（吉川弘文館、一九七九年）所収によった。

(22) 山口泰弘「増山雪斎の同時代評価に関する文献的検討」（『三重大学教育学部紀要』五十七号　三重大学教育学部、二〇〇六年）が紹介する。ただ、正賢の風流振りを挙げたもので、安部家と増山家の関係性には触れていない。

(23) 正賢の影響か、信亨の性質によったものかは不分明。前掲註16有坂氏論考では、増山正賢と同時期に加番を勤めた大名が書画への関心を高めた理由に、少なからず正賢の影響があったためとの見解が示されている。

(24) 安部家と蒹葭堂との関係を指摘したのは、有坂道子「木村蒹葭堂の交際圏――『蒹葭堂日記』に見える武士に着目して（一）」で、交際の始まりが天明六年（一七八六）の信亨加番在坂中に遡るものと述べ、日記を通じて六十回にのぼる接触があったことを明らかとしている。

(25) 岸邉成雄『江戸時代の琴士物語』（有隣堂、二〇〇〇年）参照。同著は江戸時代の琴士に関する大著で、本稿も多くこれに拠った。

(26) 中馬場村（現八潮市）出身で、算学者として知られる。

(27) 前掲註25『江戸時代の琴士物語』参照。また、長澤和彦「江戸文人の交遊―七琴琴社（空々琴社）の人々―」（『近世文芸研究と評論』第七十号　近世文芸研究と評論の会、二〇〇六年）など。なお、江戸時代の主要琴士であった空々について取り上げる論考には、山口正義「千葉歳胤と児玉空々」（『あゆみ』第三十六号　毛呂山郷土史研究会、二〇一三年）などがある。

(28) 国立国会図書館所蔵『竹逸琴話』所収。同書は空々の琴社社友を連ねた「琴社諸友記」「諸友会于行元精舎者」のほか、空々の高弟であった篠本竹堂の門人を記した「竹堂迎暾新盟諸子姓氏」を収める。

(29) 古くは杉村英治『亀田鵬斎の世界』（三樹書房、一九八五年）所収「閒叟雑録」において、空々琴社と正賢・信亨の関係が触れられている。

(30) 前掲註27長澤氏論文参照。

(31) 安部家文書No.196。なお、原題は「〔漢詩〕（暮春従　岡部侯静遠館）」

(32) 信亭と親しかった正賢も本国長島城内に庭園「独楽園」を造っており、その際に諸家から寄せられた詩文が「独楽園賀詞帖」として今日まで伝わる。有坂道子「伊勢長島藩主　増山雪斎の文人交流―『独楽園賀詞帖』に見る」（『なにわ・大阪文化遺産学研究センター二〇〇六』　関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇六年）参照。ただし、仮に安部家が庭園を造園していたとしても同家の江戸屋敷は上屋敷が最大で五〇〇〇坪ほどであり、それほど大規模なものではなかったものと思われる。

(33) 我妻榮吉『三重県の画人伝』（岩田僊太郎、一九一五年）によれば、名は順、字は伯祐、長島侯の儒臣として父の風を継いで書画を善くした。生歿年は不詳。伊藤重信『長島町史』（長島町教育委員会、一九七四年）では、寛政十年（一七九八）に致仕した父梅厓の跡を継ぎ、正賢、正寧に仕えたとする。同書では更に、十時家が天保年間に故あって長島藩を脱藩したとする。

(34) 梅厓の書画仲介については神谷勝弘氏の「十時梅厓による書画の仲介―内田蘭渚宛書簡を手掛かりに―」（『同志社国文学』八十四号　同志社大学国文学会、二〇一六年）に詳しい。同論考では、享和元年（一八〇一）九月二十一日付書簡のなかで梅厓が尾張の商家内田蘭渚宛てに安部信亭・増山正賢・董九如・武田信明・稲垣定淳による寄合画を工面したことが挙げられている。いずれも本文中で名前が登場する面々であり、安部家とそれらの間の強固な絆が再確認できる。

(35) 日本書誌学体系四十五（二）『相見香雨集　二』（青裳堂書店、一九八六年）所収「蒹葭堂と立原翠軒　蒹葭堂江戸下向のこと其他」参照。定淳と安部家の接点は定かではないが、寛政十二年（一八〇〇）時、定淳が加番、信亭が定番として勤番が重なる時期がみられる。

(36) 日本書誌学体系四十五（四）『相見香雨集　四』（青裳堂書店、一九九六年）所収「焼画と稲垣如蘭」に詳しい。同論によれば稲垣家は文墨に秀でた当主を輩出している。

(37) 水田紀久「『采風集』刊前刊後」（『近世文芸』四十七号　日本近世文学会、一九八七年）、川見典久「一宮長常の制作における「生写」　装剣金工の文様表現にみる合理性」（『黒川古文化研究所紀要　古文化研究』十四号　黒川古文化研究所、二〇一五年）参照。

(38) その事跡については、安部家家臣それぞれの履歴を綴った「〔藩中家譜三～六〕」（池田氏収集文書No.1～4）に詳しい。

(39) 『八名郡志』（八名郡、一九二六年）参照。

(40) 「〔藩中家譜三～五〕」（池田氏収集文書No.1～3）参照。家譜によれば、士義は天明五年からの出仕となっており、藩校就将館の開校時期もその時期にあてられよう。

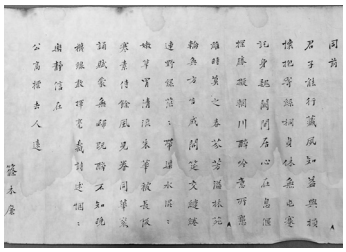
(41) 渡辺玄対の交際については、平井良直「『林麓耆老娯観』の分析と考察～化政期江戸文人寿宴の一断面～」（『相模女子大学紀要』66A　相模女子大学、二〇〇三年）に詳しい。

(42) 王羲之が永和九年（三五三）に文士四十一人と蘭亭に会して催された。この時詠ぜられた詩集に記した序が名筆として名高い「蘭亭序」。前掲註19山口氏論考では大田南畝の『細推物理』に記された享和三年（一八〇三）の酒井忠道の宴席が蘭亭曲水に擬えられたものであったことを挙げ、当時における文化人の中華趣味の浸透ぶりについて指摘する。藩主信亭の趣向を受け、家老ほか知識階層にあった家臣の間にも中国趣味が広がっていたことを窺わせる。

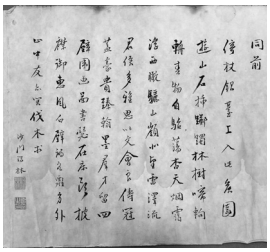
(43) ただし、勤番内でも家格が異なっており、安部家、稲垣家は無城主大名で江戸城殿中席は菊間だが、増山家は城持大名で殿中席は雁間であった。按ずるに、家格よりも実際に同じ職責を全うするもの同士の意識のほうが強かったのではないかと推測される。

(44) 『大田南畝全集』第十九巻（岩波書店、一九八九年）所収〈享和元年〉八月十七日付島崎金次郎宛て書状参照。浅田宗兵衛は、「藩中家譜六」（池田氏収集文書No.4）によれば、諱名を正任、摂丹代官にて十五人扶持を支給される身分であった（のち郡奉行に昇進）。

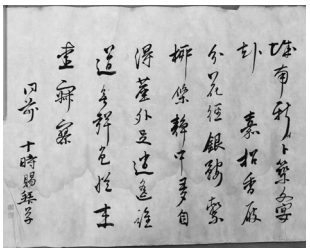
①児玉慎（児玉空々）



②篠本廉（篠本竹堂）



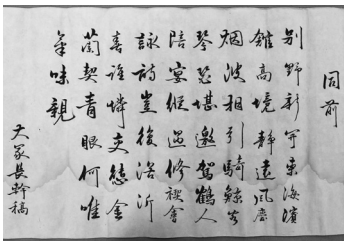
③沙門瑞林（詳細不詳）



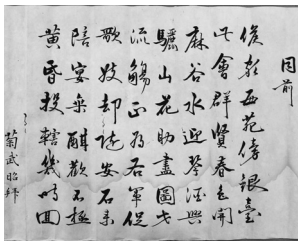
④十時賜（十時梅厓）

⑤南湖鯤（春木南湖）

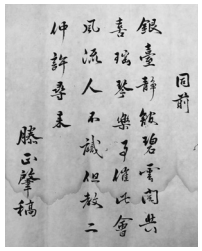
⑥邉瑛（渡辺玄対）



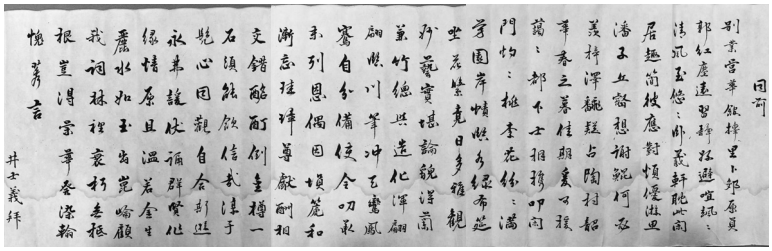
⑦大塚長幹（尾張藩士）



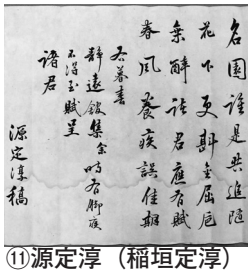
⑧菊武昭（菊池武昭）



⑨滕正肇（詳細不詳）



⑩井士義（井上士義）



⑪源定淳（稲垣定淳）

暮春従岡部侯静遠館

①侯家別業銀台側　深樹鶯／声春色闌
座上芳樽任客／酌　墻中翠竹縦他看　勝
遊／詠属騒人興　恵政跡存民／庶歓　不
是包容海天大　微／躬何得侍詞壇／別
業驪山北　架楼杳藹間／荷潭魚初躍　花
樹鳥飛還／静性皆相愜　禅心随処閑／
琴中山水趣　誰復此追攀／児玉慎

②同前／君子能行蔵　夙知益与損／懐
抱寄絲桐　貞休無屯蹇／託身魏闕間　居
心在息偃／探勝擬輞川　酔吟意所懇／
維時莫之春　芬芳溢林苑／輪奐方告成
開筵交繾綣／連野緑茫々　帶渠水混々
／嫩草冒清流　朱華被長阪／寒素侍余
風　見眷同華衮／誦賦蒙無帰　既酔不知
晩／襪線敢揮毫　裁詩述悃々／楽静信
在／公　高標去人遠／篠本廉

③同前／倚杖銀台上　入此侯園／遊　山
石挿躑躅　林樹啼鞠／輸　春物自駘蕩
杳天烟靄／浮　西瞰驪山嶺　北望雷沢流
／君侯多雅思　以文会良儔　冠／蓋豪貴
臻　翰墨群才留　四／壁圍画図　書瑟在
床頭　披／襟御恵風　白壁詩文酬　方外
／止中友　亦関伐木求／沙門瑞林

④城南新卜築　文宴／卦嘉招　香履／分
花径　銀鞍繋　柳條　静中多自／得　塵
外足逍遥　誰／道無声色　従来／愛寂寥
／同前　十時賜拝草

⑤銀台新築倚清／渓　静遠楼頭瀹／海
西　簾水仮山／花寂々　欄前径路／草
萋々　坐迎高／貴青雲近　賦入／幽情白
雲斎　相／値論文窓月下／鳳雛応上碧
梧啼／同前　南湖鯤拝草

⑥同前／使君乗暇日　丘壑／放幽情　数
里山荘／静　文章園樹清／相忘翫琴酒
不用／厭簪纓　似春芳歇／流　鶯爰々鳴
惜／邉瑛稿

⑦同前／別野新開東海浜／館高境静遠
風塵／烟波相引騎鯨客／琴瑟堪邀駕鶴
人／陪宴縦遇修禊会／詠詩豈復浴沂／
春　誰憐交態金／蘭契　青眼何唯／気味
親／大冢長幹稿

⑧同前／侯家西苑傍銀台／此会群賢春
色開／麻谷水迎琴酒興／驪山花助尽図
才／流觴正為右軍促／歌妓却随安石来
／陪宴乗酣歓不極／黄昏投轄幾時回／
菊武昭拝

⑨同前／銀台静館碧雲開　共／喜瑶琴
楽事催　此会／風流人不識　但教二／仲
許尋来／滕正肇稿

⑩同前／別業営華館　択里卜郊原　負／
郭紅塵遠　習静好避喧　颯々／清風至
悠々臥羲軒　耽此閑／居趣　簡彼応対煩
優游思／潘子　丘壑想謝鯤　何必／羨梓
沢　飜疑占陶村　韶／華春之暮　佳期爰
可援／藹々都下士　相携叩閑／門　灼々
桃李花　紛々満／芳園　岸幘臨水緑　布
筵／坐花繁　竟日多雅観／妙芸実堪論
貌得蘭／兼竹　総与造化渾　翩／翩臨川
筆　冲天鸞鳳／騫　自分備使令　叨承／
末列恩　偶因塤篪和／漸忘珪璋尊　献酬
相／交錯　酩酊倒金樽　一／石湏能飲
信哉淳于／髡　心同観自合　斯遊／永弗
諼　伏誦群賢作／縁情原且温　若金生／
麗水　如玉出崑崙　顧／我詞林裡　衰朽
無抵／根　豈得栄華発　染翰／愧莠言／
井士義拝

⑪名園誰是共追随／花下更斟金屈巵／
乗酔諸君応有賦／春風養疾誤佳期／右
暮春／静遠館集余時有脚疾／不得至賦
呈／諸君／源定淳稿